

学 位 論 文 題 名

可能表現の対照研究

－ 日本語・中国語・朝鮮語の意味の対照を中心に －

学位論文内容の要旨

本論文は7章から構成されている。

第1章「序論」は、本論文の目的、研究対象と方法、研究意義などである。

第2章は、日本語・中国語・朝鮮語の順に可能表現に関する先行研究の概観を行ったうえで、本論文の立場を述べている。

日本語の可能表現の研究では、主に「能力の意味」、「可能の意味」、「可能性の意味（認知可能）」の3つに焦点が当てられ、「このお酒はなかなか飲める」のような「価値の意味」、「18歳未満の人は入れません」のような「許可・許容の意味」は、可能表現として取り上げられることはあるものの、周辺的なものとしてしか扱われていないのが現状である。上の「このお酒はなかなか飲める」という価値の意味を表すものは日本語ではあまり生産的ではないこともあり、「能力可能」の中に入れてられて周辺的に扱われている。

中国語においても、その事情は同じで、やはり「価値の意味」「許可・許容の意味」について積極的に取り上げて研究しているものは見当たらない。

また、朝鮮語においても、これまで可能表現を表す個別の形式を取り上げての研究はされているが、可能表現全体を対象にした研究はまだ十分にされていない。中でも、「만 하다(-man hata)」という形式は、明らかに可能の意味を表すにもかかわらず、これまでの研究では可能形式として正當に扱われてはいなかった。朝鮮語教育においても「만 하다(-man hata)」という形式は可能形式として教えられていないのが現状である。

しかし、三ヶ国語の可能表現を詳細に検討して見ると、いずれも上述の五つの意味を表していることがわかる。とするならば可能表現の意味領域の中に、「能力の意味」、「可能の意味」、「可能性の意味」の他に、「価値の意味」と「許可・許容の意味」をも追加する必要があることを主張するわけです。

第3章では、言語別にそれぞれの可能形式がどのタイプの意味を表すかについて具体的な例をあげる形で考察している。そして、いくつかの形式同じタイプの意味を表す場合、その形式が表す意味の違いについて記述している。

特に、中国語と朝鮮語について、中国語の可能表現は可能助動詞と可能補語で表わされますが、可能助動詞のなかの「能」と「可以」が主に「能力可能」の意味を担い、可能補語は非典型的な可能表現の意味をほとんど表わさず、典型的な可能表現のなかの条件可能を主に

表すという制限があることを指摘している。

朝鮮語の可能表現としては、これまで可能形式として取り上げることのなかった「만하다(-man hata)」を取り上げ、一般によく使用される「-을 수 있다(-ul swu issta)」との違いについて分析した。朝鮮語では、「-을 수 있다(-ul swu issta)」の形式が可能表現のうち、「能力可能」と「条件可能」の意味のほとんどをカバーするが、「能力可能」のうちの習得可能専用の形「-을 줄 알다(-ul cul alda)」があって、「運転できる」「フランス語が話せる」のような場合にはこの形を使うことになる。

第4章では、三ヶ国語を対照しながら、典型的な可能表現である「能力可能」と「条件可能」の特徴及び「能力可能」と「条件可能」の関係について論じている。

第5章では、非典型的な可能表現である「認知可能」、「価値の可能」、「許可・許容の可能」の特徴及び三つの意味を表す場合の三ヶ国語の相違点、典型的な可能表現との関係について記述している。

「認知可能」は、日本語は「うる・える」で中国語は「能・会」朝鮮語は「알/이/있다」で表すが、この章では、主語が有情物か無情物か、意志動詞か非意志動詞かの4つの組み合わせによりどのような違いが見られるかを詳細に分析している。

また、典型的な可能表現との比較を通して、典型的な可能表現は主語として有情物を取り、述部動詞として意志動詞を要求するのに対して、「認知可能」つまり可能性を表す場合は有情物・無情物とも主語になりうるし、意志動詞、無意志動詞とも述部動詞になりうるという違いがあることを指摘している。

また、中国語の「能(neng)」「会(hui)」という形式は、「うる・える」という可能性の意味のほかに、場合によって「はずだ」「にちがいない」という意味を表すこともあり、内容(言表内容)に対する発話時の話し手の主観的態度—〈言表態度〉—を表すモダリティ形式と考えることができるとしている。

「価値の可能」については、日本語の「価値の可能」が「能力可能」からの意味の拡張と捉えられるのに対して、中国語・朝鮮語には、それぞれ「可以」만하다(manhata)という

「価値の可能」を表す形式が存在しているという違いがある。「価値の可能」と典型的な可能表現との関係において、三ヶ国語ともに主体(具象物・抽象物)の能力・性能に話し手の評価が与えられているという点で、「能力可能」との関わりを持っていることがわかる。それゆえに、本論文の可能表現の体系—ある条件から事柄(動作)の実現の如何を問題にする—の中に位置づけることができる。

「許可・許容の可能」については、まず、三ヶ国語の可能表現を「～てもいい」に相当する形式で置き換えが可能かどうかで、許可・許容の意味を表すかどうかを判断し、さらに、許可・許容の意味を表す条件について考察しつつ、3ヶ国語の対照をおこなっている。

ただ日本語・朝鮮語は典型的な可能表現からの意味の拡張と考えられるのに対して、中国語の場合は「可以」という形式が、広く「～してもいい」という意味で使用され、本来的に許可・許容の意味を表しているという違いがあるとしている。

学位論文審査の要旨

主査	教授	門脇誠一
副査	教授	小野芳彦
副査	教授	安西真
副査	助教授	松江崇

学位論文題名

可能表現の対照研究

－日本語・中国語・朝鮮語の意味の対照を中心に－

本論文は、日本語・中国語・朝鮮語の可能表現を意味の面から対照することにより、三ヶ国語における可能表現の類似点・相違点を明らかにすることを目的とするものである。その際、研究が比較的進んでいる日本語の枠組みを利用し、それに変更を加えたものを土台にして、三ヶ国語の可能表現が互いにどのように対応しあっているかを考察するという方法をとっている。

可能表現が表す意味は、ふつう「この赤ちゃんはもう歩ける」のように、主体にある能力が備わっているどうかを表す「能力の意味」、「足の怪我が治ったので、もう歩ける」のように、ある条件のもとで、事柄の実現が可能であるかどうかを表す「可能の意味」、さらに、「このようなことはいつでも起こりうる」のように、出来事やありさまの実現・存在などの「可能性（見込み）の意味（認知可能ともいう）」が中心として扱われてきたが、これ以外にも周辺的ではあるが、いくつかの意味があることがわかっている。しかし、その範囲は言語によって異なり、また典型的な意味との関わり方も同一ではない。

本論文では、日本語・中国語・朝鮮語の三ヶ国語における可能表現を考察するには、上述の3つの意味にさらに「価値」、「許可・許容」の意味をも非典型的な意味としてその枠組みの中に位置づける必要があることについて検討している。

本論文の成果は次のように要約できる。

- ① 日本語の能力表現の一つである「能力可能」をさらに、先天的能力・習得による能力・能力付与の3つに下位区分したり、可能表現のなかに「価値の意味」「許可・許容の意味」を加えるなど、日本語・中国語・朝鮮語の可能表現を分析する際の新たな枠組みを提供した点
- ② 朝鮮語に関して、これまで可能表現を表す形式として積極的に扱われてこなかった 만하다(-man hata)という形式を可能形式として正當に位置づけた点

- ③ 中国語に関しても、「価値の意味」「許可・許容の意味」を可能表現の一部として位置づけた点
- ④ 日本人の中国語・朝鮮語学習者にとって可能表現を学習する際のおおきな助けになるという点

これらは、言語文化的な交流の密接だった東アジア地域において、特定の言語表現の意味用法を精密に比較することで得られた意味用法の拡張と言語間のずれの事例として重要なものである。本研究は共時的な分析を確実に行うことに主眼があるので、課題として残すことになったが、朝鮮語・日本語での意味用法がどのような原理で文化的に優位な中国語の意味用法に一致しなかったのか、あるいは、影響が強い故に周辺的な用法が生まれたのかというような、意味論分野の通時的な研究課題が発見された意義は大きい。

本審査委員会は慎重に審査し、以上の理由に基づいて本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。